



TAKAHAGI next





01

直売所で味わいたい、四季の豊かな恵み

国道461号線に沿って峠を登ると、直売所「清流の郷 花貫物産センター」が見えてきます。建屋は八角形、吹き抜けの屋根が特徴的。店内に入ると、地場の米・野菜や山菜、花貫フルーツほおずきやこんにやくなどがズラリ。朝採り野菜はすぐに売り切れてしまうほどの人気です。

センターには加工所が併設されており、フレッシュな手作り味噌やこんにやく、おこわなどのお惣菜を販売しています。ほかにも「花貫フルーツほおずき倶楽部」が生産・販売する花貫フルーツほおずきジャムやアイス、地元の養蜂家の蜂蜜、花木、木工品などが一堂に集められており、高萩市の自然の恵みを感じさせてくれます。

食堂では、そばやうどんを中心に、さまざまな地域の特産品を使ったメニューを提供。新緑の季節には山菜のてんぷらが、冬はけんちんそばやうどんがよく売れているそうです。地元産の花貫フルーツほおずきやブルーベリーソースをかけたソフトクリームも人気。これらの食品は市街地などにも卸していますが、多賀山系の景色を眺めながらの味わいは格別。産地ならではの鮮度と味を楽しめます。

※花貫フルーツほおずきとは地元の生産者で構成された「花貫フルーツほおずき倶楽部」が栽培している高萩市の名産品です。
独特の甘酸っぱさと粒の触感が楽しいと評判の食用ほおずき。
海外では栄養価の高いスーパーフードとして古くから食べられています。

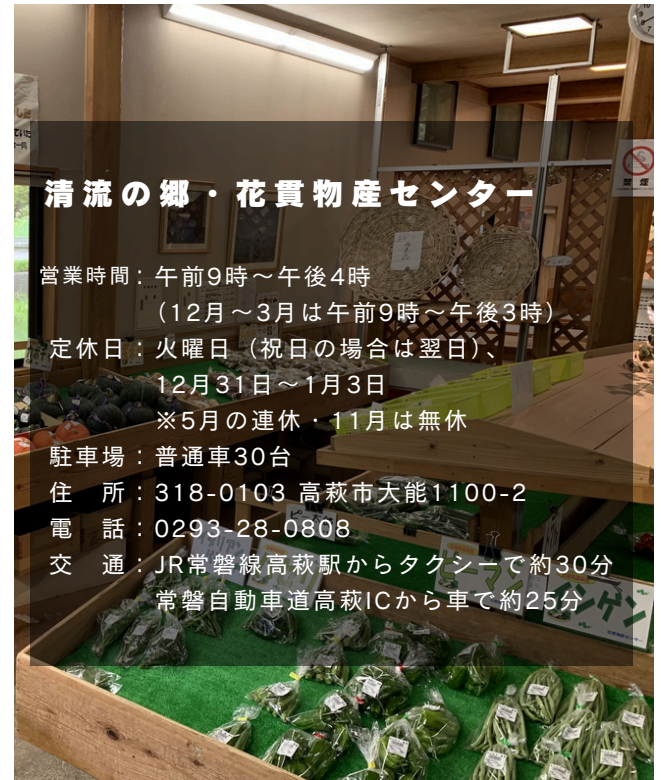
02

季節ごとにイベント開催

季節ごとに、センターはイベント会場に変貌します。春には「山菜まつり」や「菖蒲まつり」、夏には「七夕まつり」、秋から冬にかけては「収穫祭（新米まつり）」や「感謝祭」が行われ、観光客の足を誘います。

山菜まつりでは、無料の天ぷらが振る舞われ、収穫祭では、地場産の米や野菜があたる豪華抽選会、縁起がいいとされる行事「投げ餅」を開催。高萩市の情報発信の役割も担っています。

センターのすぐそばにあるのが、花貫川。県の北部を縦貫する多賀山系の堅破山(標高688.2m)に源を発し、流路延長19.4kmの二級河川です。高萩市の大切な水源であるとともに、紅葉の名所「花貫溪谷」、伝説の地「名馬里ヶ淵」、キャンプ場などが点在する観光スポットでもあります。



03

海が見える「花貫ダム」

花貫溪谷には「花貫ダム」があります。市の上水道用水、農、工業用水の供給、洪水調節などのために建設された多目的ダムで、1973年に完成しました。「海に見えるダム」としても知られています。



林業から農業へ 課題に地域で取り組む



花貫物産センターは、高萩市の高岡地区の農家の方々によって運営されています。直売所で売られている農産物は、生産者が直接持ち込むためとても新鮮。中間に入る業者がないため、消費者は新鮮な農産物を安く購入でき、生産者は実入りが多くなるというメリットがあります。

佐川邦夫さんは市職員として勤める傍ら、兼業農家として米や野菜を作ってきました。65歳まで勤めた市役所では農林課の勤務が長く、行政と農家の双方の立場を熟知する人物です。出身は同市の海岸に面した赤浜地区で、恵子さんとの結婚を機に1972年に大能に移り住みました。

一帯は古くから林業が盛んでした。しかし、1970年代から国産材は輸入材に押され、日本各地で林業は衰退していきます。大能地区では主産業を農業へシフトしますが、日照時間が短いことや斜面の多い地形、気温や水温の低さなど、多くの障壁を乗り越えなければなりません。山で「山の米はまずい」と言われながらも、佐川さんたちは山村の振興のため、農作物の品種改良や販路の確保などに懸命に取り組みました。「その結果、今は平地に負けないコシヒカリが収穫できる」と邦夫さんは話します。「花貫フルーツはおずき」など新たな特産品もできました。妻の恵子さんは、農業に勤しみながら特産品の味噌も作っています。国産大豆を使った寒仕込みの味噌は、素朴な味わいが楽しめるのとふるさと納税の返礼品として人気を集めています。

物産センターの運営は、外部の業者を頼れない分、売れる商品の分析や新商品の立案など、経営面での努力も求められます。アットホームな雰囲気がセンターの魅力のひとつですが、見えないところには地元の人々の創意工夫がありました。「お客さんが美味しいと言ってくれたり、遠くから買いに来てくれたりするの嬉しい。なによりの励みになります」と恵子さん。

豊かな自然のなかで生き生きと暮らす人の多い大能ですが、一方で、環境の変化や少子高齢化の問題は無視できないものとなっています。恵子さんによれば、かつての花貫川では夏は集落の子供たちが元気に遊び、お盆には藁で編んだ小舟にお供え物を乗せて流す「お盆流し」という風習があったそう。「ダムが出来る前は、もっと水量があつて、水も今よりきれいでした」。半世紀の間に消えていった風景もあるのです。



「100年サクラ」に寄せる未来への思い

世代を繋ぐ人材も現れて始めています。地域おこし協力隊や、自分らしい働き方や充実したセカンドライフを求めて、高萩市に移り住む人が少しずつ増えているのです。佐川さんご夫婦の4人の子どものうちの1人は「農業を覚えたい」と定期的に帰省するようになりました。邦夫さんは「まだまだ足手まといだけど」と辛口の評価をしていましたが、表情を見ればその動きを歓迎していることがわかります。

編集者紹介

・富永 周也

本業は紙媒体の編集記者、
フリーでWebライター。

最近の自己テーマは多拠点
生活と食料自給力アップ。
狩猟免許持ちのペーパーハンター。

作成日 2025.2.8

協力しあいながら土地を守り、暮らし続けてきた人々の懐の深さ、温かさ。ご夫婦の話を聞くうちに、ふるさとに帰ってきたような懐かしい気持ちになりました。「ここらは住むにはいいところ。人もいい」（邦夫さん）。「たくさんの人に足を運んでもらえたら」（恵子さん）。2人の言葉から新しく高萩に関わろうとする人を歓迎する気持ちが伝わってきます。

大能には樹齢100年といわれる見事なサクラの大木があり、毎年4月には「大能桜を見る会」が行われます。佐川さんご夫婦とのお子さんの世代、地域で新たに生活を始める人々が、サクラの樹の下でにぎやかに集う。そんな光景が目には飛びました。



大能は、人よし、
水よし、空気よし

花貫川で遊んだ、のどかな少年時代

「子供時代は学校が終わるとよく実家の農作業を手伝っていました。昭和32、33年頃のことです。当時は炭鉱が盛んで、高萩もすごく賑わっていました。近所に石炭を運ぶ線路があつて、よく蒸気機関車が運搬するところを見ました。農作業の手伝いがない時は、花貫川で泳いだり、魚を採ったりして元気に遊びましたよ。夏は農業用水路から米作りのために田んぼに水を引いていたんですが、お盆になるとその水路をせき止めてもいいことになっていたのので、水をとめた川でヤマメなどをよく獲ったものです」

このようにかつての高萩での暮らしを振り返る星好夫さんは、高校卒業後は日立市の専門学校を卒業し、いくつかの転職をしたのちに水戸の広告会社に就職。仙台支社に異動したことから、70歳まで仙台で暮らしました。「広告会社を退社した後は、タクシー運転手として長年勤務しました。70歳になって目も悪くなってきたし、そろそろ辞め時かなと考えていたころ、母親の実家が空いているのを知り大能に移住してきたんです。退職後はのんびりと野菜でも作って暮らしたいと思っていたのでちょうど良かった」

野菜は手をかければかけただけ旨くなる

現在は小規模ながら、食用ほおずき、食用菊、その他、野菜類を一人で育てています。自家消費しない分は、花貫物産センターに卸して販売。メインで栽培しているのは、「花貫フルーツほおずき」で、大能地区で活動している「花貫フルーツほおずき倶楽部」の一員でもあります。

「食用ほおずきは栽培を始めて5年くらいですかね、高萩の名産品なので、一生懸命育てています。食用ほおずきは暑さや寒さに弱いのですが、大能は夏の暑さは厳しくないのが、育てるにはちょうどよい気候なんです。2024年度の作付けは、諸事情もあり前年度より2割減少しました。ほおずきは手を抜くとダメなんです。とくに大事なのが「芽かき」で、実のなる枝に次々と「わき芽」が出てくるので、それを毎日のように摘んでやらなければなりません。余分な枝葉に養分をとられないようにするのが大変なんです。夏場から秋の収穫までは気が抜けませんね。でも野菜は手をかければ、かけるだけ旨くなりますから。人間は裏切ることもあるけど、野菜は裏切らないですからね(笑)」



Profile

星 好夫

高萩市大能在住の星好夫さんは市内秋山の農家の生まれ。20代半ばで高萩を離れ、長い間、仙台で生活。70歳で退職したことをきっかけに、高萩市にUターン。母親の実家の土地と畑を継ぎ「花貫フルーツほおずき」栽培を中心とした農業に従事。充実したセカンドライフを満喫しています。



花貫フルーツほおずき(ゴールデンベリー)

空気が良くて水も旨い。住んでいる人の人柄もいいのが、大能の良いところ

星さんは高萩市にUターンして8年目。大能地区の良いところを伺ってみました。
「仙台でタクシーの運転手をしている頃はけっこう疲れることが多かったんですが、大能に移住してからはそれがなくなりましたね。空気がいいせいかな。水もいいですよ。この地域は井戸水を飲料水にしているんだけど、それが美味しいんです。あとは、住んでいる方々の人柄がいいですね。だから移住にはぴったりだと思います。人は増えたほうがいいから、みんな温かく迎えてくれますよ」



ほおずきは開花後、約2か月で完熟

移住を考えている方々へのアドバイスを求めたところ「ここで生きていくんだという覚悟は持ってきていただきたいですね。人になにかを教えてもらおうというのが先に立ってはうまくいかないと思いますよ。自分から積極的に土地の中に入ってなじんでいこうという主体的な姿勢が欲しいですね」とのこと。

星さんは現在「もってのほか」という食用菊も栽培しています。実は仙台時代に庭で育てていた品種で、それを高萩でも育て始めました。もしかしたら星さんは、はっきりと意識はしていなくても、実は心のどこかで高萩に戻り、農業をしたいと思っていたのかもしれません。



農業にやりがいを感じる

ただし、Uターンを決意したときに思っていた「退職後はのんびりと野菜を育てて暮らしたい」という構想と現実は少し違うものになっているよう。想定していたより農業は大変で忙しいそうです。

「でもね、いまの暮らしには充分満足していますよ。農業は手間がかかりますけど、野菜が旨くできるとやりがいを感じられますから」

星さんの前向きな姿勢は「退職後のセカンドキャリアとしての移住」を検討されている人々への励みになりそうです。

編集者紹介

・YANAGI

八王子市在住。
旅とウォーキングと歴史とバイクと猫が好きな自由人。
高萩市は「自分の田舎のように落ち着ける場所」
作成日 2025.2.8



高萩市の名産「花貫フルーツほおずき」は以下施設やネット通販にて購入可能。
・清流の郷・花貫物産センター
・やすんでっ亭
・高萩観光案内所「メモリア」
生のほおずきは8月中旬から11月初旬にかけて販売(天候により期間は変動)。
ふるさと納税の返礼品にもなっているほか、「花貫フルーツほおずき」を使用したアイスやジャムはネットで通年販売されている。

夫婦で紡ぐ高萩移住



養蜂家への道

「移住は一大決心でした。家のこと、仕事のこと、家族のこと。不安に思うことはたくさんありました。一步踏み出すというよりは、思い切って飛び込むような気持ちで移住しました」と石井崇士さんは語ります。

高萩市で養蜂業を営む石井さんご夫婦は「背伸びをしない暮らし」を楽しんでいます。自然を愛する石井さんご夫婦にとって高萩市での養蜂家としての暮らしは非常に充実したもの。川釣りや山を散歩する時間を大切に、自然の変化を受け入れた生活をととても幸せだと感じているそうです。



Profile

石井 崇士

茨城県水戸市出身。高校卒業後は埼玉県の印刷会社に勤務。都会での生活が肌に合わず、4年ほどで退職し地元へUターン。その後けがで高萩市の病院へ通っていた際に、知人の古民家改修を手伝う。お礼として古民家を譲り受けたのをきっかけに、高萩へ移住する。自然にまつわる仕事をしたいと考え、養蜂家になるのを決意。1年間の修行を経て独立し、高萩市で養蜂業を営む。

自然と向き合いながら見つけた安らぎ

夫の崇士さんは茨城県水戸市出身。自然との距離が近い幼少期を過ごしました。高校卒業後は埼玉県の印刷会社に就職しましたが、都会の生活があわず水戸へ帰郷。その後、けがの療養のために高萩市の病院へ通うようになります。

そんな時に声がかかり、友人が高萩市に所有する古民家の改修を手伝うようになりました。石井さんの友人は、7～8年ほど誰も住んでいない状態だった古民家を改修するものの、使い道はなかったそうです。そこで、石井さんに「住んでみないか」と声をかけます。石井さんご夫婦は友人の厚意を受け、高萩市で古民家暮らしをすることになりました。

夫の崇士さんは「住処は決まったものの、自分に合う仕事が見つからず悩んでいた」と語ります。自然にまつわる仕事ができないかと考えていたとき、テレビで養蜂に関する放送を見て興味を持ちました。

「養蜂家という言葉聞いた時、自然が好きな自分ならできるかもしれないと思いました。やってみないと周りに伝えていくうちに師匠と出会い、弟子入りしたんです。その後、周りの方々の支えもあり、高萩市の養蜂家として独立しました」

石井さんご夫婦は、国の補助金を活用し、新たな仕事に挑戦し始めました。

石井さんご夫婦が養蜂業を始めて2年ほど。夫の崇士さんは「自然を相手にする仕事だからこそ、すべてが順調にいくわけではない」と言います。

「はちみつがうまくとれず、落ち込むこともあります。でも、星空を見上げると救われるんです。庭から流星群が見えることも珍しくないんですよ」

仕事として自然と向き合い、悩む。そして、自然の変化を楽しむ。石井さんご夫婦はそんな毎日を過ごしています。

夫である崇士さんが養蜂を行い、妻の真央さんははちみつのパッケージをデザインするなど、2人は夫婦で支え合いながら移住先での生活を築いています。今、高萩市では前向きに頑張る石井さんご夫婦のことを応援してくれる人たちが増えているそうです。



移住の秘訣は思いやりを忘れないこと

移住に成功した秘訣はありますかという問いに対して、夫の崇士さんは「相手への思いやりと感謝の気持ちを忘れないことです」と答えてくれました。地域の風土を理解し、人とのつながりを大切にすることを大切にし続けた結果、毎日が幸せだと感じる移住生活を実現できているそうです。

そもそも、移住して養蜂業を始めるのは簡単ではありません。養蜂はハチを買い入れ育てることはもちろん、道具を揃え、巣箱を複数の場所へ設置する必要があります。そのためには、ご近所との関係性を構築することが不可欠。人間から危害を加えなければ、ハチは基本的におとなしい生き物ですが、その生態を知らない人からすれば、近所に突然ハチの巣箱が置かれていれば「刺されるのではないか」という不安に襲われます。安全性や周辺環境への影響について説明したうえで、巣箱の設置許可を得ていく必要があるのです。

夫の崇士さんは、人当たりの良さと持ち前のコミュニケーション能力の高さで、地域の人に巣箱を置ける場所を教えてもらいながら、理解者を増やしていきました。現在も地域の人に協力してもらうことで養蜂ができる場所を増やしているそうです。さらに、地域の物産展や観光案内所ではちみつを販売するなど、活躍の場を増やし続けています。

石井さんご夫婦が育てているハチを見てみると、周りへの気遣いがいかに大切かがよく分かります。

ハチの性格は飼育者の対応によって変化します。人が不便な環境だとイライラするように、ハチも環境や接し方によって性格が変化します。石井さんのハチは、定期視察で訪れる保健所の方も驚くほどおとなしい性格なのだそうです。そのため石井さんご夫婦は、ハチが髪に絡まったりしないようにと、基本的に頭と顔を網で覆う程度の軽装で作業することができています。

筆者も手にハチを乗せてみましたが、全く怖くなく、愛おしいと感じるほどでした。生き物にも無償の愛情を注ぐ石井さんの優しい心が、移住先の人々との温かなつながりも生み出したのでしょう。



感謝を込めて高萩の人たちに恩返しを

石井さんご夫婦の目標は「早く養蜂業を安定させること」だと話します。それは、目先の生活を安定させ豊かにさせるためだけではなく。崇士さんは「仕事を安定させて、お世話になった高萩市の人たちに恩返しをしたい」と言います。

移住者と地域住民の人が互いを助け、思い合うのは、移住の理想的なあり方のひとつでしょう。今後、石井さんご夫婦がどのように高萩市と関わり、活躍していくのかがとても楽しみです。

石井さんご夫婦のはちみつは「高萩農産物直売所」「高萩やすんでっ亭」「清流の郷・花貫物産センター」で購入が可能です。高萩市へ訪れた際には、高萩の自然の恵みと愛情がこもったはちみつをぜひ堪能してみてください。

編集者紹介

・なつき

旅好きの大学生。
気ままに散歩するのが好き。
高萩市で見つけた町中の好き
なところは、空が広いところ
と街灯がかわいいところ。

・せいや（福田聖也）

ライター、温泉ソムリエ、
パンシェルジュ。
石井さんご夫婦のはちみつを
たっぷりかけた「ハニートー
スト」が推し。

作成日 2025.2.8